

神野洋三

小説

家元



神野洋三

小説

家元



日本經濟新聞社

<著 者>

神野洋三（じんの・ようぞう）

昭和5年兵庫県生まれ。早大仏文科卒。
コピーライター、ルポライター等を経て
現在、出版企画プロダクション代表。
小説作品に、『海河』（蒼森社）がある。

小説家 元

昭和五十四年十一月六日 一刷

著 者 神 野 洋 三

© Yōzō Jinno 1979

発行者 黒 川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五
電話 (03) 550-0151 振替 東京一五五

印刷・東光整版／製本・大口製本

0093-9748-5825

¥980.-

第十章	第九章	第八章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	目
仮	復	奸	秘	事	取	援	対	野	前	
面	讐	計	密	件	引	軍	決	望	兆	次

260	240	217	181	161	138	117	92	54	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	---

装丁
田村義也

小說家元

第一章 前 兆

1

「きみからの希望の件は、すべて幹事長に伝えておいた」

と、影山雄之介は、まばたきもせず大きな眼で二階堂明男を見つめながら言った。

「……これまで、党のためにいろいろ尽力してくれたきみのことだ、党としても、きみの政界進出は喜んで迎えたい。宗教団体をバックにした公正党を牽制するためにも、引きつづききみのところにはわが党を支援してもらいたい。幹事長ははっきりとそうに言っていた……」

影山は、茶色のツイードの上衣の右のポケットからパイプと煙草の葉の入った革の袋をとり出した。磨きのかかった黒褐色のパイプを左掌で包むようにして持ち、右の指で煙草の葉をつめた。二階堂明男は、黙って、ポケットからライターを取り出し影山に差し出した。軽く頭を下げライターを受け取ると影山は、顔を少し斜めにして火をつけた。ライターをテーブルの上に置いた。

二階堂明男は、六十歳を半ばくらい越えた年齢である。色白で彫りが深く、顔立は歌舞伎役者の女形のように柔和だった。禿げ上った聡明そうな額、ふちなし眼鏡の奥で、鷹のような鋭い目が輝いていた。薄茶のダブルの背広を着た二階堂明男は、硝子製のテーブルを間にして影山雄之

介と対い合つて坐っていた。

赤坂にある古い由緒あるホテルの一室だった。寢室と応接間に控室のついた三間つづきの特別室である。立花流華道会理事長の要職にある二階堂明男は、秘密を要する話合いの折り、好んでこのホテルの特別室を予約した。

二階堂明男と影山雄之介は、東大法学部の同級である。国文学者であり歌舞伎の研究者として著名な小野寺二郎をまじえて、三人は共に一高時代を柔道部で送った仲であった。

大蔵官僚出身の影山雄之介は、民友党に所属する代議士で、現幹事長川上誠一郎を首領とする川上派に属していた。影山は、パイプをくわえ、悠然と一口くゆらせてから言った。

「話は変わるが……」

影山は、パイプを右の掌に持ちかえた。その手を、ひざの上に置いた。

「花岡松太郎という人物の名を知っているね……」

「花岡というと、あのマスコミの帝王と言われる男のことが」

「その通りだ」

二階堂明男はげんな表情をした。

「花岡松太郎の経営する『につぼん新聞』が、最近部数の上で毎朝新聞を追い抜いたことはわたしも聞いた。その人物がどうかしたのか……」

影山は二階堂の顔を正面から見つめた。秘密を打ち明ける口調になった。

「幹事長が、花岡を必要としている」

「花岡を川上はんが……」

影山は、鼻の脇に笑いをみせながらつぶけた。

「しかし、総裁の大島派の幹部が花岡に接近しているという噂が党内に流れている。もし花岡が大島派についたとなるとことはめんどうだ。大島派はいまでも党内最大の派閥だ。マスコミ王の花岡がバックにつけば一層確固たる勢力を張るようになる。そうなる……」

と、言いかけて影山はにやりと笑った。二階堂は、目を窓のほうに向けた。暖房のために硝子窓が少しばかり曇っていた。薄い白い蒸気の張った硝子ごじに見える空を、自衛隊のヘリコプターでもあろうか、三機が編隊を組んで、ゆっくりと左から右へと飛んでいた。

「……ともかく、政権は長期にわたって大島派のものになる」

「それで……」

と、二階堂は視線を影山に向けた。影山は、その目を見返すようにして言った。

「花岡松太郎をわが川上派にひき入りたい。それにはきみの力が是非必要だ」

「わしに何ができるといふのか」

二階堂は苦笑した。煙草盆の蓋を開けた。細巻の葉巻煙草を一本、右の指でつまんだ。くわえとテーブルの上に置かれたままのライターを取って火をつけた。

「花岡にはまだ、嫁に行かない娘が一人いる。末娘の三女で、三十歳をひとつふたつ越えた年齢だ。S女子学院出の才媛だが、大人しすぎるせいかどうも縁遠い……」

「花岡の三女とうちの家元との縁談をわしにすすめよとも言うのかね」

「さすがに話が早い」

影山は肉の厚い手でひざを叩いた。一高時代柔道部のキャプテンを務めた影山である。その時きたえた腕力が、国会でも大いに役立っていることは二階堂も聞いていた。

二階堂明男は、影山のくずれた大きな耳たぶに目をとめた。つぶれた耳たぶは、毎朝のように柔道の稽古にはげんだ名残りである。過ぎ去った青春時代の日々がそこには残っている。何でも打ち明けて話せる気軽さがふたりの間にはあった。二階堂は低い声で言った。

「若い男と女がいるというだけでは縁談がまとまるはずもなかるうが……」

「それが、両家は一本の糸につながれているのだよ」

影山は、たいこ腹を乗り出した。パイプの吸い口を二階堂のほうに向けた。手を上下に振りながらしゃべった。

「きみのところに竹田青嵐といういけ花の先生がいるな」

「青嵐なら東京支部長をしている……」

「その青嵐に花岡の細君が師事している。しかも、仲々熱心な弟子らしい。青嵐を尊敬もしているようだ」

「なるほど……」

と、二階堂はようやく納得のいく表情になった。煙草の灰を灰皿に落した。竹田青嵐は、花岡松太郎が経営する新聞の寄稿家のひとりだった。

青嵐が、立花流華道会で勢力をもっているのも、「につぼん新聞」の後援があったればこそであ

る。しかし、その社主である花岡松太郎の妻が、青嵐の弟子であることは二階堂は知らなかった。わざと、青嵐はそのことを理事長である自分にもらさなかったのか……表面は屈服しているように装ってはいるが裏側では何を企んでいるのか……。

二階堂明男は、長椅子の背に体重をかけると胸を張った。細巻の葉巻煙草を口の右端にくわえて深く吸うと勢いよく煙を吐いた。紫色の煙は、クリーム色の壁にかかったユトリロの淡い色彩の風景画のほうへ輪を描きながら流れた。

影山は、二階堂の目を見ながらつつけた。

「花岡は、細君には頭が上らんといい噂だ」

影山は、目のふちに皺をみせて笑った。前歯の間につめたプラチナがきらつと輝いた。それつきり、しゃべろうとはしなかった。部屋の中を、脂肪のついた太い首をまわしてだるそうに見廻した。

部屋は、十八階にあり二十畳程の広さである。廊下に通じる扉が、二階堂の坐った長椅子の向うにあった。寝室へ通じる白い扉は、影山から見て右手にある。付人のための控室は反対側にあった。窓が、影山の背後と斜前にひらけていた。

二階堂明男は、沈黙を守ったままにいる四十年來の親友の、ブルドックのような顔を見ながら、胸中を推し計っていた。……指図こそしないが、自分に、しかるべき措置を講じてほしいというのであろう……そのことが、政界進出の機会をあたえるための条件だと、影山は暗に語っている。

縁談がまとまれば、花岡家と立花家は姻戚関係が成立する。

立花流をバックにして政界に進出した二階堂明男が川上派に属することで、花岡松太郎は川上幹事長を次期総裁として強力にバックアップする……影山の持ち込んだ縁組の筋書はおそらくそのようなものであろう。

影山は、目を窓のほうから二階堂へ向けた。パイプを一口吸ってから念を押すように言った。

「協力してくれるだろうな」

「協力はしたい。しかし……」

と、話をにしながら二階堂は葉巻煙草をいきなり灰皿の中でねじりつぶした。

「青嵐がどのような態度に出るか。それに……」

と言つて二階堂は、口を閉じた。しばらく沈黙を守った後で口を開いた。

「……家元の縁談となると伯母にあたる家内が黙ってはいまい」

「きみも女房には頭が上らないというのか」

影山は脂ぎった顔に笑みを浮かべた。

「立花家にとつても悪い話ではあるまいが……」

「悪い話ではないが……」

二階堂は、顎を突き出すようにして視線を天井に向けた。何かを思案する顔になった。

影山は、しわがれた声で押しつけるように言った。

「ともかく、縁談は成功させたい。いや、是非とも成功させなければならんのだよ」

二階堂明男は、影山雄之介を部屋から送り出した後、窓の前に立って両腕を組んだ。キラキラと輝く白い陽光を浴びて、国会議事堂のどっしりとした建物のがのぞめた。白聖の殿堂のはるか遠くのほうに、富士山の峰が、まるで画にでも描いたようにくつきりと見えた。

2

いけ花の始祖は池坊と言われている。二階堂明男が理事長をつとめる立花流華道会は、江戸時代の中期、池坊から分れて流派を興した歴史の古い家元である。

現在の家元立花華恵は三十五代目だった。その立花華恵が渡米する日のことである。

東京国際空港の送迎デッキに、若い門弟のひとりである竹田桜子がいた。

十月十三日、時刻は、夜の九時を半時間程すぎていた。空港には、ホノルル・ロサンゼルス行日航862便が、巨大な機体を横たえていた。

送迎デッキから見下ろすと、強烈な人工の光の中で、銀色の巨体がにぶい鉛色に見えた。機体のそばには、まだ乗客の姿はなかった。

冷めた風が吹き抜ける送迎デッキの上で竹田桜子は、人影が現われるのを待っていた。

淡い桃色に金糸の花模様のリんずの和服。胸の前で両手を合わせるようにして彼女は立っていた。

その時である。――

桜子は、とつぜん左肩に触れる厚い掌を感じた。振りかえると、二階堂明男の顔がすぐ近くに

あった。

空港ビルから照射される黄白色の光線の中で、二階堂の姿は妙に大きく見えた。濃紺のダブルの背広が、一メートル八十近くある背丈によく似合っていた。

「桜ちゃん」

と、二階堂明男は親しみのこもった言い方をした。

「……来年の春花展では、そろそろ賞でもとれるようにならんとあきまへんな」

予期もしていなかった言葉だった。桜子は、二十八歳になったばかりである。立花流に入門したのは八歳の頃で、約二十年間この世界の水に親しんできた。父親の竹田青嵐は、長年立花流の幹部を務めている。いまでも東京支部長の職にあった。名門育ちの桜子は、年季の入った門弟のひとりと言えた。が、幹部の平均年齢が五十五歳という高年齢社会のこの世界ではまだ若輩の身だった。理事長からじきじきに言葉をかけられるほどの資格はまだ備わってはいなかった。

二階堂明男は、おだやかな言葉づかいでつづけた。

「……春に東京の大学が開校になれば、思いきって若い教授を置きたいとも思うてます。桜ちゃんにも、ここらできばつてもらわねばあきまへんな……」

「ありがとうございます」

桜子は、両手をひざの前にそろえるといねいに頭を下げた。顔を上げた時色白の桜子の頬は桃色に染っていた。もし、これが、昼間の明るい場所であつたらどうか。顔に表われた狼狽の色を読みとられたはずである。

立花流で一方の勢力を代表する竹田青嵐を父とする桜子だった。理事長とは言え、声をかけられて頬を染めたとあっては何かと都合が悪かった。

それでも、やはり、じかに言葉をかけられたことは光栄だった。しかも、話の内容は、『春花展』での受賞にふれた話だ。

『春花展』は、三大新聞のひとつである毎朝新聞の後援で、毎春、銀座のデパートで催される。京都で秋に開かれる『鎮花祭』と並んだ立花流二大行事のひとつだった。賞には、金、銀、銅の三賞のほか新人賞など十幾つがあった。そのどれを受賞しても名誉にはちがいがなかったが、とりわけ三賞のひとつにでも選ばれば将来を約束されたも同然だった。

しかも、来年の『春花展』は、初代華好宗匠三百年祭に加えて、立花学園東京短期大学開校という目出度い行事も重なっていた。

へ理事長の支持さえ得られれば、このわたしもひょっとすると受賞できるかもしれない。受賞できれば、新しく開校する東京の大学の教授の話も夢ではなくなるわけだ……

桜子は胸を躍らせて顔を横に向けた。すでに、二階堂の姿はなかった。

二階堂明男は、いつの間にか桜子のそばを離れていた。送迎デッキの鉄の手すりに右手をかけ、彼女に横顔を見せていた。

桜子は、二階堂に熱い視線を送った。先程言われた言葉を反すうしてみた。

へ東京の大学が開校になれば、思いきって若い教授を置きたいとも思うてます……

試動する国内線旅客機のエンジンの音、耳を聳する金属性の轟音をかいくぐってアナウンスが

流れた。

「日本航空のお報せを申し上げます。日本航空862便、ホノルル・ロサンゼルス行、ただいま18番ゲートよりご搭乗のご案内を申し上げます」

鋭い爆発音をのこして飛び立ったカイロ行エジプト航空のジェットエンジンの音に重なり英語のアナウンスがつづいた。

「ジャパンエアライン フライト エイトシックストウ デイパアテイニング フォ ホノルル
アンド ロサンゼルス ナオ レディ フォ ボオディング アト ゲイト エイティーン」

やがて、日航862便のそばに乗客たちが姿を現わした。人影は一列になってタラップを昇り始めた。

「宗匠さあん……」

と、黄色い声がとんだ。

タラップに足をかけようとしていた青年が送迎デッキに顔を向けた。目もとの涼し気な若者だった。グレーのスラックスに紺色のブレザー、顔の肌は浅黒いが、端正な顔立はいかにも育ちの良さを表わしていた。

若者は手をあげると、大きく左右に振った。華道家元立花流三十五代宗匠華恵である。華恵は、関西の私立大学文学部哲学科を卒業した。一ヵ月程前に三十五歳になったばかりだった。

手を振る華恵にこたえて、

「お元気で！」